

最近よく聞く、

ICFって何だろう??

ICFは、人の健康に関係する状況を表すための標準的な概念的・言語的枠組みとして開発された、WHO(世界保健機関)の国際分類の一つです(2001年採択)。ICFとは、International Classification of Functioning, Disability and Health の頭文字をとったもので、日本語では、「国際生活機能分類」と訳されています。

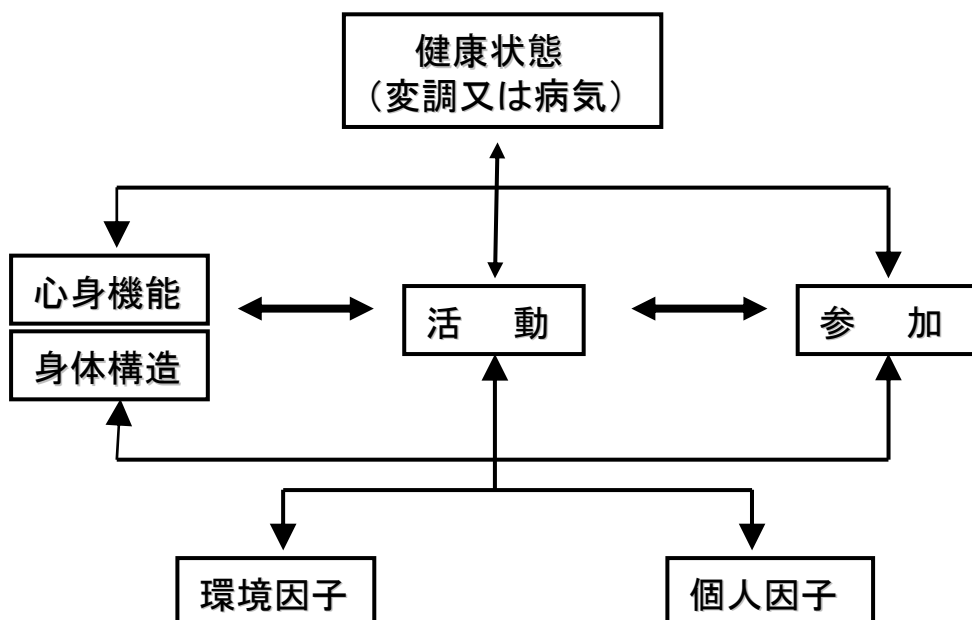
日本語版の概要は、下記の厚生労働省のページで見ることができます。

<http://www.mhlw.go.jp/houdou/2002/08/h0805-1.html>

具体的な中身は?

人の生活は、「健康状態」、「心身機能」、「身体構造」、「活動と参加」、「環境因子」、「個人因子」という要素(合計1424項目)が次の図のように相互に作用しながら成り立っているものとして捉え、これらの項目を用いて個々の状況を表します。

この考え方のもとでは、例えば、ADHDという診断を受けた子どもが学校の授業への取り組み(←「参加」)がうまくできない場合、「この子はADHD(←「健康状態」)だから...」と一方向的に判断するのではなく、「授業という『参加』がうまくいかないのは、どんな要素が影響し合っているのかな?」と多面的に捉えることができます。



(裏面へ続く)

どのように活用されているの？

子どもに関していえば、表の頁にある概念図を参考にしながら子どもの様子を理解し、併せて支援策を考える取り組みなどが報告されています（「ICF活用の取り組み」ジース教育新社等）。多面的な子どもへの理解、多職種・家族等の間での共通理解等への活用による効果が報告される一方で、さらに本人の気持ちの部分（←現在、WHOの研究グループが「主観的側面」として検討しています。）を取り入れる必要性や、概念だけでなくもっと項目を活用すべき、等の声もあります。

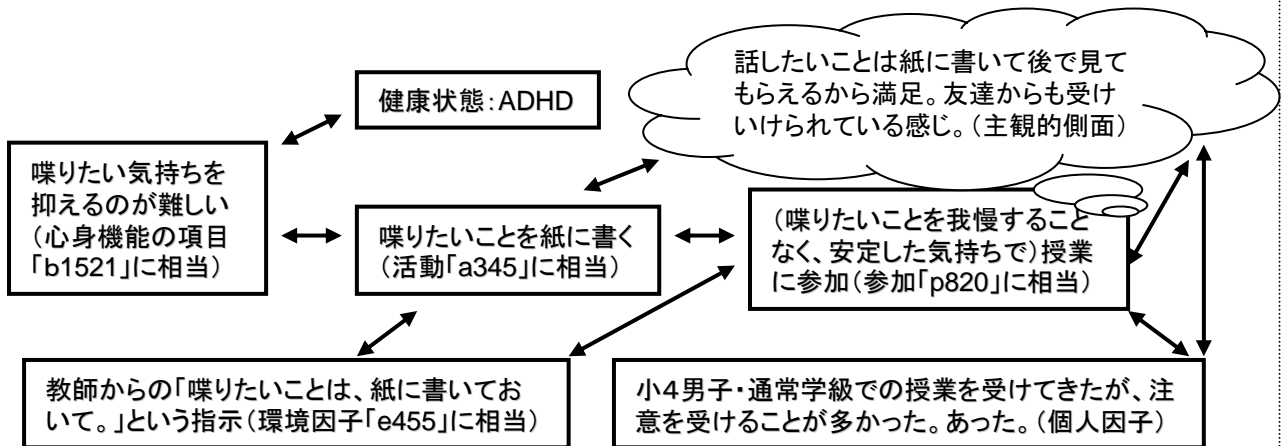
また、子ども向けのICFとして、ICF version for Children and Youth (ICF-CY, 児童青年期版(仮訳))がWHOの関係会議で2006年に承認されています。

ケースへの具体的な活用例

(高山恵子・品川裕香「気になる子がぐんぐん伸びる授業」小学館 内のケース例を改編)

例えば、授業中、静かにしなければいけないのに、ぺらぺらと喋り続け、そのことでクラスの友達から煙たがられていることを自分でも気づいても、話さずにはいられないという特性があり、ADHDという診断を受けた子どもがいます。

その子どもがうまく授業に参加できるために、ICFの枠組みからは次のように考えられます。



国としての取り組みは？

「障害者基本計画(2002)」において、障害の理解や施策推進の観点からICFの活用法策を検討する旨が述べられ、担当省庁である厚生労働省においては、2006年に社会保障審議会に専門委員会を設け、ICFに関する諸課題について検討を進めています。

一方、教育の分野では、中央教育審議会の特別支援教育に関する専門部会において、次の学習指導要領とICFとの関係について議論され、また、国立特別支援教育総合研究所においては、ICF-CYに関する研究が行われています。